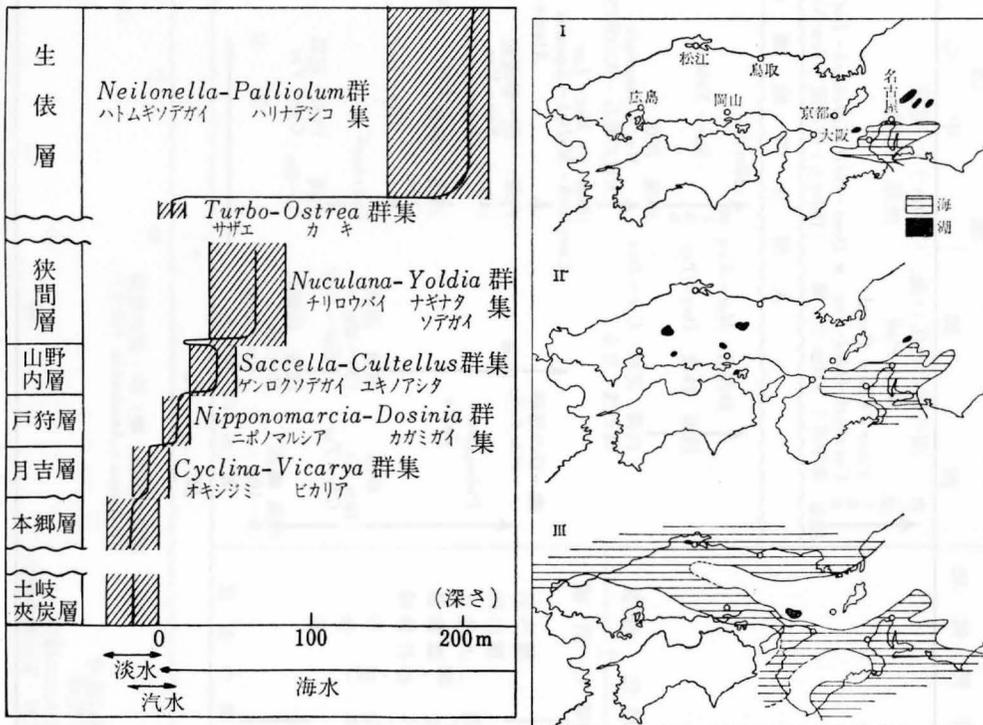


XVII. 瑞浪層群の古環境・古地理・地史

糸魚川 淳二

瑞浪層群の古環境，古地理，地史についてはすでに何度かのべた（糸魚川 1960，糸魚川 1963，糸魚川・柴田 1973，糸魚川 1973）。その基本的な考え方は変わっていないが，多くの資料，新しい事実の追加によって，内容的な向上，充実が可能となった。今回，明らかにされたことをまとめると次のようになる。

1. 貝類化石について，いままで不明であった点が明らかにされ，また，より細かく解析された。山野内層，狭間層，名滝礫岩層，生俵泥岩層の化石群集などはその代表的な例である。多板綱についても多くの事実が示された。
2. 植物化石では，明世累層中・上部，生俵累層の化石植物群が明らかになった。
3. 軟骨魚類とくにサメ類の歯について群集解析が可能となった。
4. 哺乳動物について，中央道調査で採集されたものその他，未報告の多くの資料が採集され，総合された。
5. フジツボ類，腕足類，こけ虫類，珊瑚類，環形類，海綿類，硬骨魚類などが新しく研究された。
6. ウニ類，有孔虫類，生痕，珪藻などについても，多くの新しい事実を得た。



////// は深さの範囲を示す。

第XVII-2図 第一瀬戸内海古地理図

第XVII-1図 貝類化石群と古環境の変化

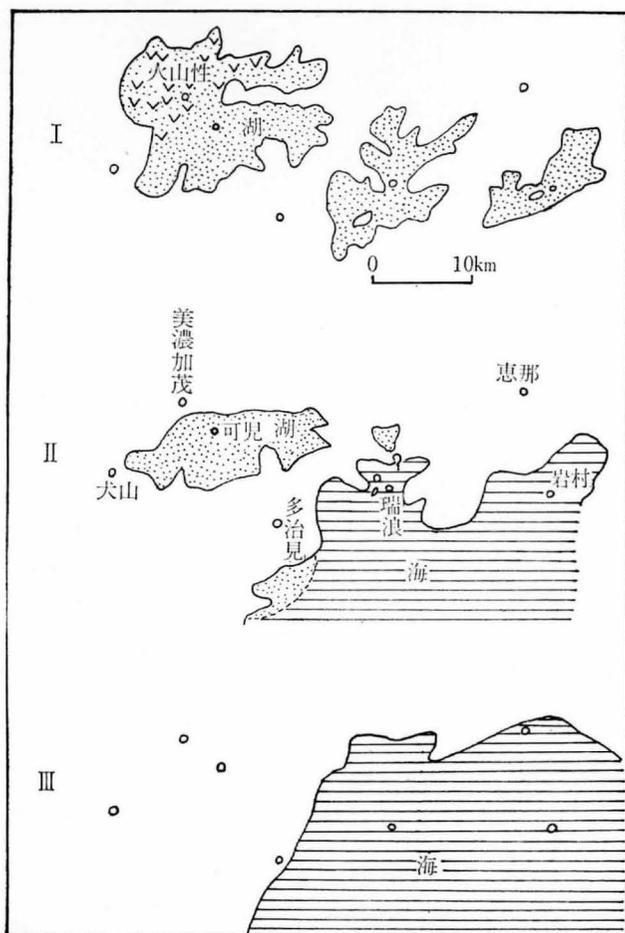
7. 層序について検討が行われた。宿洞砂岩相を生俣果層の基底（名滝礫岩層）より切りはなし、明世果層最上部層準とした。

以上の成果は古環境の復元について重要な資料を提供する。たとえば、植物による気候条件の推定、冷水の影響を示すいくつかの資料（フジツボ、こけ虫、多毛類など）、造礁サンゴが宿洞砂岩相に限られることなどである。貝類化石により推定される古環境（とくに海の深さ）の変遷は第XVII-1図に示されるが、このようにして得られた変遷のカーブは、古瀬戸内中新統全般にわたって適用できるものである（前章参照）。この貝類化石による資料を中心に、他のデータを加えて、古環境の変遷をまとめたのが第XVII-1表である。

古地理については、瑞浪層群について（第XVII-2図）、第一瀬戸内累層群について（第XVII-3図）にまとめた。

このような成果をもとにして、瑞浪層群、第一瀬戸内累層群の地史を組立てることが可能である。くわしくは将来の研究課題として残すとして、かんたんに云えば、瀬戸内区における中新世の海進は、いちじるしい3回の小海進—小海退のくりかえしであり、その振幅は時代を追って大きくなった。瑞浪地域では、1. 湖、2. 湖→海、3. 海のプロセスをとっている。海進は瑞浪地域では南より及んだと考えられる。火山活動はこの地域では決してはげしくはないが、全体を通じて、多くの火山碎屑物の供給があったといえる。

日本列島において、グリーンタフ造山と呼ばれる運動があった時期に、似非クラトン盆地（quasi-cratonic basin）（横山 1954）において、その運動の反映として進行した過程が、瑞浪層群・第一瀬戸内累層群に記録されているといえよう。このような視点にたつて、日本列島の中新世の地史の中で瑞浪層群を位置づけることが必要であり、また可能であろう。



第XVII-3図 瑞浪層群古地理図